

熊本地震震災ミュージアムの実現 に向けた基本方針

平成 30 年 3 月

熊 本 県

目 次

1 策定の趣旨等	
（１）策定の趣旨	・・・・・・・・ 1
（２）基本方針の位置付け	・・・・・・・・ 1
2 震災ミュージアムの全体像	
（１）基本コンセプト	・・・・・・・・ 2
（２）形態	・・・・・・・・ 2
（３）構成	・・・・・・・・ 3
（４）名称	・・・・・・・・ 3
（５）震災ミュージアムの活用	・・・・・・・・ 3
（６）展示内容等	・・・・・・・・ 7
（７）進化し続ける震災ミュージアム	・・・・・・・・ 8
3 震災ミュージアムの実現に向けた取組	
（１）震災遺構等の保存	・・・・・・・・ 8
（２）拠点の整備	・・・・・・・・ 9
（３）回廊ルートの設定	・・・・・・・・ 10
（４）記憶、教訓等を伝承する取組等	・・・・・・・・ 14
（５）持続可能な運営に向けた取組	・・・・・・・・ 15
4 事業費及び財源の確保	・・・・・・・・ 15
5 役割・推進体制、スケジュール	
（１）役割・推進体制等	・・・・・・・・ 16
（２）スケジュール	・・・・・・・・ 18

1 策定の趣旨等

(1) 策定の趣旨

震度7の地震が、わずか28時間の間に二度発生した平成28年熊本地震（以下、「熊本地震」という。）は、本県に甚大な被害をもたらしました。

発災から2年が経過しようとする中、本県は国内外からの多くの支援のもと、熊本地震からの復興に向け着実に歩みを進めています。

いただいた多くの支援に感謝の意をもって応える意味でも、今後いつどこで起こるかわからない大規模災害に備え、熊本地震の記憶や経験、教訓を後世に遺し、本県のみならず広く国内外に発信していくことは、熊本地震を経験した我々の責務と考えています。そのため本県では、専門的知見を有する学識者等で構成する「熊本地震震災ミュージアムのあり方検討有識者会議」（以下「有識者会議」という。）を設置し、熊本地震の経験や教訓を確実に後世に伝える上で、極めて有効と考えられる断層や被災建物等の震災遺構の保存・活用方法について、検討を行って参りました。

平成29年9月末の有識者会議からの震災ミュージアムのあり方検討報告を受け、熊本地震の教訓等を確実に後世に伝承し、今後の自然災害に生かすとともに、自然環境や文化的資産を生かした観光振興、地域の活性化など、一日も早い熊本地震からの復興を進める震災ミュージアムを復旧・復興の3原則の一つ「復旧・復興を熊本の更なる発展につなげる」復興の柱として実現するため、このたび基本方針を取りまとめました。

(2) 基本方針の位置付け

本基本方針は、震災ミュージアムの実現に向け必要な取組を示すものであり、「熊本地震からの創造的な復興の実現に向けた提言（平成28年6月提言）」をはじめ、次の各計画等に定められた様々な取組と十分に連携していきます。

【基本方針策定の基礎となる計画等】

- 「平成28年熊本地震からの復旧・復興プラン」
(平成28年8月策定、12月改訂)
- 「熊本復旧・復興4カ年戦略」
(平成28年12月策定)
- 「熊本地震震災ミュージアムのあり方検討有識者会議報告書」
(平成29年9月報告)

【取組にあたって連携を図る計画等】

- 国立公園満喫プロジェクト「阿蘇くじゅう国立公園ステップアッププログラム
2020」
(平成28年12月策定)
- 「大空港構想 Next Stage（熊本都市圏東部地域グランドデザイン）」
(平成28年12月策定)
- 「ようこそくまもと観光立県推進計画（2017-2019）」
(平成29年9月策定)

2 震災ミュージアムの全体像

(1) 基本コンセプト

熊本地震の震災遺構等を活用した震災ミュージアムの実現により、熊本地震の記憶や経験、教訓を確実に後世に伝承し、本県のみならず国内外の防災・減災への対応力の強化を図るとともに、災害に強く、誇れる資産を次代につなぎ、夢にあふれる新たな熊本の創造を目指します。

震災ミュージアムは、「復旧・復興の3原則」の一つ「復旧・復興を熊本の更なる発展につなげる」復興の柱として、県庁内の全部局連携のもと、市町村や関係団体ともしっかりと連携・協力しながら、その実現に向けて取り組みます。

<基本コンセプト>

- ① 熊本地震の経験や教訓を学び、風化させず確実に後世に伝承する
- ② 今後の大規模自然災害に向けた防災対応の強化を図る
- ③ 熊本の自然特性を学び、改めて自然を恐れ、郷土を愛する心を育む
- ④ これらの震災ミュージアムの取組を通して、国内外からの交流人口の拡大を図り被災地域、ひいては本県の更なる発展につなげる

基本コンセプトに基づき、震災ミュージアムが担う基本的な機能は、次のとおりとします。

- ・「学び伝える」 …… 熊本地震のありのままの姿、記憶や経験、得られた教訓などを伝承する
- ・「備える」 …… 今後の大規模自然災害に向けた防災対応の強化を図る
- ・「発信する」 …… 復旧・復興に向け歩む熊本の姿を国内外に発信する
- ・「創り興す」 …… 創造的な復興に取り組み、地域振興や観光振興を図る
- ・「結び育てる」 …… 熊本を知り、郷土を愛する心を育む
- ・「祈る」 …… 犠牲になられた方々を想い、追悼・鎮魂する

なお、取組を進めるに当たっては、①観測史上初めてとなる同一地域において震度7の地震が、わずか28時間の間に二度発生したこと、②最大震度1以上の余震回数が気象庁による観測を開始して以来過去最多となり、避難期間の長期化や、車中泊避難を含む屋外避難等が多数発生したこと、③約30kmにわたって地表地震断層が出現し、その断層沿いの広範囲に甚大な被害が及んだことなど、熊本地震の特徴を十分に踏まえ、50年後、100年後までも熊本地震の記憶や経験、教訓を永く伝え続けるものとします。

(2) 形態

28時間内での二度にわたる震度7の激震の発生、長く続く大きな余震、約30kmにわたる地表地震断層の出現、県民生活への多大な影響、復興に向けた県民の様々な取組など、熊本地震の特徴を踏まえつつ、そのありのままの姿を確実に後世に遺していくため、震災ミュージアムの形態は、熊本地震により県内各地に広範囲に出現した断層等の震災遺構とともに、熊本地震の痕跡を残す文化・交流施設など地域の拠点、企業活動の場、地域における復興に向けた活動の拠点、さらに復旧・復興に向かう地域の人々の姿が確認できるものや地域の魅力を伝える観光施設や観光地などを広域的につなぎ、巡る「回廊形式」とします。

さらに、市町村の主体性を尊重しつつ、県と市町村が連携する中で、市町村が、それぞれ

の視点から描くテーマに基づく回廊と、県が、広域的な視点から描くテーマに基づく回廊が相乗作用する二層構造とします。

(3) 構成

回廊形式の震災ミュージアムの構成要素は、次のとおりとします。

- ・ 県内各地に点在する震災遺構等のすべてを活用の対象として捉え、その上で、県又は市町村が、目的を持って後世に遺したいと考える「震災遺構等」
- ・ 県が、広域的な視点から熊本地震全体に関する情報を効果的に発信するために整備する「中核拠点」や市町村がそれぞれの視点から情報を発信するために整備する「地域の拠点」
- ・ 地域の魅力を伝える観光施設や観光地、既存の文化・交流施設、地域活動の場、企業活動の場など、熊本地震の痕跡を残し、あるいは熊本の自然の豊かさや自然災害との共存の歴史、文化を学び知ることができるもの、各地域における復興に向けた活動の拠点
- ・ その他、熊本地震の教訓等を伝承するに当たり必要なもの

(参考) 震災遺構等とは

- ・ 地震により出現した断層や被災建物、自然の遺物や人工構造物、建築物等
- ・ 揺れや被害の大きさ、避難生活の難しさなどを表現し、熊本地震を想起させるもの
- ・ 原状回復を前提としているが、熊本地震からの復旧・復興の過程が確認できる構造物、建築物等
- ・ その他、熊本地震の記憶等を伝えうるもの（有形・無形）

(4) 名称

本県における震災ミュージアムは、県内各地に点在する震災遺構等を巡る回廊形式のフィールドミュージアムであることから、その名称は、「熊本地震 記憶の廻廊」とします。

(5) 震災ミュージアムの活用

震災ミュージアムにおいては、熊本地震の記憶や教訓等を伝承するだけでなく、震災遺構等の特徴を生かして、「学び伝える」、「備える」、「発信する」、「創り興す」、「結び育てる」、「祈る」の6つの視点から様々な取組を進めます。

なお、取組に当たっては、各地に点在する震災遺構等を単体で活用するだけでなく、エリアでとらえ、複数の震災遺構等をつないで活用するなど、相乗的により高い効果が得られるよう十分留意します。

- ① 熊本地震の記憶や経験、教訓の伝承の場として活用 ～ 学び伝える ～
熊本地震の記憶を風化させず、確実に後世に伝承します。

【具体的な取組例】

- ・ 震災遺構等の保存
- ・ 熊本地震の教訓等をはじめ、様々な情報を発信する拠点の整備 など

② 防災対応の強化への活用 ～ 備える ～

大規模地震災害の被害の実態、災害対応から得られた教訓等を学び、今後の災害に備えた地域の防災対応の更なる強化を図ります。

- ア 自助や共助の強化につながる教訓が学べる防災教育や防災訓練の場として活用します。
- イ ボランティア活動や避難所運営のあり方を学ぶ場として活用します。
- ウ 医療機関や社会福祉施設等における災害対応力の向上に活用します。
- エ 企業におけるBCP¹の策定支援や防災研修において活用します。
- オ 大学等研究機関における地震に関する研究の場として活用します。
- カ 建築物等における工学的な対策の検証の場として活用します。

【具体的な取組例】

- ・ 防災士養成研修の実施
- ・ 自主防災組織の活動や地区防災計画の策定、ハザードマップの作成等への支援など、各地域における防災活動に関する各種相談窓口の設置
- ・ ボランティア活動や避難所運営に関する事例紹介や体験訓練の実施
- ・ 医療機関や社会福祉施設等における災害対応の実例の紹介と今後の対応策についての情報共有、職員研修の実施（出前講座を含む。）
- ・ 大学や学術団体等の研究者、建築関係者による耐震化の強化に向けた視察や研修の受入
- ・ 熊本地震での経験を踏まえた、県内企業におけるBCP策定の実例紹介・大学等研究機関による防災対策や地震のメカニズム等に関する研究成果に関する情報発信（各種イベントやセミナー等の開催等） など

③ 家庭や学校における防災教育等への活用

～ 学び伝える、備える、結び育てる ～

今後の自然災害に備え、家庭における防災対策や地域における自助・共助の取組など、日頃から自ら災害に備えることの大切さを伝えるとともに、防災意識や災害対応力の向上を図ります。さらに、若い世代の防災意識の向上を図るため、小学校、中学校、高等学校はもとより、大学等と連携した取組を強化します。

また、熊本地震から、災害を引き起こすが恵みももたらす自然との共存の歴史や文化を学び、改めて熊本を深く知るとともに、郷土熊本を愛する心の育成につなげます。

- ア 学校・教育機関等における防災意識や災害対応力の向上に活用します。
- イ 自然災害との共存の歴史や熊本の文化など、郷土熊本を知る場として活用します。

¹ BCP：事業継続計画（Business Continuity Plan）の略 災害などの緊急事態が発生した時に、企業が損害を最小限に抑え、事業の継続や復旧を図るための計画

【具体的な取組例】

- ・小学校、中学校、高等学校等における防災等に関する授業への対応（出前授業、フィールドワークを含む。）
- ・防災・減災教育をテーマとした新たな教育プログラムの開発による県外からの修学旅行の受入
- ・教職員等における災害対応能力向上に向けた研修会の実施、対応事例の共有化
- ・大学や学術団体等の研究機関における熊本地震をはじめ自然災害等に関する研究との連携・協力 など

④ 国内外に向けた情報発信への活用 ～ 発信する ～

温かい支援をいただいた多くの方々や国、自治体等に対し、感謝の意を表するとともに、世界各地で発生している自然災害への対応に寄与できるよう、熊本地震への対応状況など今後の災害に向けた防災力向上に資する情報や本県の復旧・復興の状況等を発信します。

また、被災地域におけるコミュニティの再生や地域の人材育成に向けた取組、交流人口の拡大を図り、観光振興や地域の活性化につながる情報を発信します。

【具体的な取組例】

- ・国内外からの視察等の受入、学会の誘致
- ・各種イベント等における熊本地震への対応の事例発表
- ・ポータルサイトの制作、広報誌やパンフレットの発行
- ・熊本城や被災文化財の復旧過程など様々な熊本地震関連情報の発信
- ・阿蘇くまもと空港の再整備過程、八代港の国際クルーズ拠点の形成過程、南阿蘇鉄道の復旧過程などの情報の発信
- ・熊本地震を経験した地域の方々が語り部として、被災地域におけるコミュニティ再生や新たな地域づくりの過程等の情報を発信 など

⑤ 地域振興、観光振興の資源としての活用 ～ 創り興す、結び育てる ～

熊本を訪れた方々が、県内各地に点在する震災遺構等を巡り、災害を引き起こすが恵みももたらす自然の驚異を感じ、自然との共存の歴史や熊本の文化に触れていただくことで、熊本を深く知るとともに、新たな魅力を発見していただきます。震災遺構等の保全や適正な利用に配慮しながら、震災遺構等を新たな観光資源として活用することにより、交流人口の拡大を図り、観光振興や地域の活性化、本県のさらなる発展につなげます。

ア 自然災害との共存の歴史や熊本の文化など、郷土熊本を知る場として活用します。

イ 復旧・復興の姿を見ることができる学びなどの場として、個人旅行や研修、修学旅行等の団体旅行に活用します。

ウ 他県の震災ミュージアム等とのネットワークを構築し、復旧・復興や地域づくりの活動の輪を広げます。これらの活動をはじめ、地域の様々な情報を発信するなど、地域の活力づくり、地域振興の拠点として活用します。

【具体的な取組例】

- 熊本地震の教訓等をはじめ、様々な情報を発信する拠点の整備 <再掲>
- 熊本城や被災文化財の復旧過程など、様々な熊本地震関連情報の発信 <再掲>
- 阿蘇くまもと空港の再整備過程、八代港の国際クルーズ拠点の形成過程、南阿蘇鉄道の復旧過程などの情報の発信 <再掲>
- 県内各地の地域資源と震災遺構や震災ミュージアムの拠点等が連携した新たな観光プログラムの提供
- 新たな教育旅行などの学びのプログラムの提供
- 個人や家族、グループ等が遊びながら自然災害への対応を学び、防災意識の向上につながるプログラムの提供
- 自然の驚異を現場で体感できるフィールドワーク等の体験プログラムの提供
- 震災遺構等を活用した、海外観光客への熊本地震についての情報発信
- 国立公園満喫プロジェクト事業の推進や阿蘇ユネスコ世界ジオパークなどの取組と連携した滞在型観光の促進
- 他県震災ミュージアム（中越メモリアル回廊、人と防災未来センター、北淡震災記念公園等）とのネットワークづくりや、連携した国内外向けのシンポジウム等の開催
- 県内物産品や防災グッズの開発・販売、飲食等のサービス提供
- 交通アクセスや周辺環境の整備（阿蘇くまもと空港の創造的復興や南阿蘇鉄道の復旧との連携、道路、駐車場、トイレ、物産館等の見学者や観光客受入のための環境整備等） など

⑥ 地域における各種活動への活用 ～ 結び育てる、祈る ～

地域コミュニティの再生や地域の活力づくりなどを通じて、地域の将来を担う人材を育成します。地域における防災・減災や災害対応に関する知識や意識の共有化を図り、各地域の特性を踏まえた災害に強い地域づくりを進めます。

さらに、被災地が復興に向け着実に前進している姿の発信や、失われた尊い人命への追悼・鎮魂など、地域における様々な活動につなげます。

- ア 復旧・復興をはじめ、地域の将来を担う人材の育成の場として活用します。
- イ 地域の人々が熊本地震の記憶や経験、教訓など、ありのままの熊本地震を後世に語り伝えていく場として活用します。
- ウ 自助や共助の強化につながる教訓を学ぶ防災教育や防災訓練の場として活用します。 <再掲>
- エ ボランティア活動や避難所運営のあり方を学ぶ場として活用します。 <再掲>
- オ 失われた尊い人命を追悼・鎮魂する場として活用します。
- カ 地域コミュニティの再生、創造的復興の姿をアピールする場として活用します。

【具体的な取組例】

- ・ 自主防災組織の活動や地区防災計画の策定、ハザードマップの作成等への支援など、各地域における防災活動に関する各種相談窓口の設置
＜再掲＞
- ・ ボランティア活動や避難所運営に関する事例紹介や体験訓練の実施
＜再掲＞
- ・ 語り部による講話等の活動を通じた、熊本地震の経験を語る「語り部」や近辺のフィールドを含めて案内できる「ガイド」の育成、熊本地震の被害の実情や教訓等の発信
- ・ 追悼、鎮魂のための祈りの場の整備
- ・ 復旧・復興に携わる人材の育成、NPO団体との交流
- ・ 生活再建に向けた支援にかかる情報の提供 など

(6) 展示内容等

震災ミュージアムでは、熊本地震のありのままの姿や熊本地震からの復旧・復興のプロセスを伝えるとともに、復旧・復興の過程で得られたノウハウや経験、教訓等を共有することで、今後の災害に備えた行動へとつなげるよう、様々な視点から情報提供や展示を行います。

また、併せて、地域におけるコミュニティ再生や復興に向けた様々な取組、地域の将来を担う人材育成の取組、さらに地域の魅力の発信など、交流人口を拡大し、観光振興や地域の活性化につながる展示を行います。

なお、展示等に当たっては、可能な限りありのままの姿を提供できるよう努めます。

① 震災遺構や拠点等における展示内容（例）

ア 熊本地震の痕跡（震災遺構、被災地など）

- ・ 熊本地震により出現した断層や被災建物、人工構造物等
- ・ 揺れや被害の大きさなどを表現し、熊本地震を想起させるもの
- ・ 定点カメラによる被災建物の内部の映像
- ・ 情報杭や祈念碑 など

イ 拠点施設における展示等

- ・ 熊本地震の記憶を伝える写真パネル
- ・ 被災状況の復元ジオラマ
- ・ 語り部等の活動を記録した映像や熊本地震紹介映像
- ・ 被災地の再現映像（CG、VR²映像）、デジタルアーカイブ
- ・ 国内外の国や自治体をはじめ、各種団体、法人、個人等からいただいた支援の記録、応援メッセージ など

② 提供する主なプログラム（例）

ア 震災遺構、被災地などの現場で提供するプログラム

- ・ 語り部、ガイドによる解説、体験談の講演（映像を含む。）
- ・ 周辺の震災遺構等を巡り学習・体験するトレッキング（フィールドワーク）ツアーの実施

² VR：仮想現実（Virtual Reality）の略 コンピューター等を用いて、人間の五感を含む感覚を刺激することにより、実物ではないが機能の本質は同じであるような環境を作り出し、あたかも現実のように体感させる技術

- ・避難生活や炊き出し体験等の各種イベントの開催 など
- イ 拠点施設で提供するプログラム
 - ・地震の仕組み、熊本地震の概要、デジタルアーカイブやVRを活用した震災遺構等の紹介、解説
 - ・熊本地震の教訓等を踏まえたセミナーや研修会等の開催
 - ・復旧・復興に向かう熊本の姿やその取組状況の解説
 - ・企業による災害対応事例の紹介やBCP策定事例の紹介等
 - ・熊本の自然の豊かさ、自然災害との共存の歴史、文化等の解説
 - ・地域の魅力発信（特産品、観光情報等） など

（7）進化し続ける震災ミュージアム

熊本地震からの復興には、多くの時間が必要です。郷土熊本の復興、更なる発展とともに歩み、何年経っても色あせず、熊本地震を経験した方々の想いを伝え続けることができる『進化し続ける震災ミュージアム』を創り上げていきます。

【復興とともに進化】

- 震災ミュージアムは郷土熊本の復興とともに、徐々に出来上がり、充実していきます。また、そのプロセスも発信していきます。
- 震災ミュージアムの構成は、随時見直しを行います。また、展示内容等も時間の経過に応じ、更新していきます。

【できることから着手】

- 震災ミュージアムの実現を待たず、震災遺構等や物産館、文化施設、企業活動の場など、熊本地震の痕跡を残す地域の主要拠点等を活用し、熊本地震の教訓等を伝える取組を実施します。
- 熊本地震の記憶や教訓、復興に向けた地域の様々な取組、熊本の魅力等の情報をあらゆる機会を捉えて発信します。

3 震災ミュージアムの実現に向けた取組

（1）震災遺構等の保存

熊本地震の記憶や経験、教訓を後世に伝えるものは、地震により地表に出現した断層や被災建物等の形として残るものと、被災者の避難生活の状況や人々の心、記憶等の形の無いものがあります。時代や世代を超えて伝承すべき事項、事象、そこに込めるメッセージ、語り伝えるべき相手方など、それぞれの状況に応じて、それらを震災遺構等として適切に保存し、活用します。

震災遺構等の保存に当たっては、熊本地震の規模や被害の程度を人々の心に響かせるため、できる限り「ありのままの自然な状態で、現地に保存」することが望まれます。しかし、劣化や消滅が懸念されるもの、災害からの復旧を優先するためにありのままの状態に保存することができないものもあるため、それぞれの震災遺構等の状況に応じて、最適な方法により保存します。

なお、震災遺構等は、時間の経過とともに劣化していくため、早急に保存に取り組む必要があります。

保存方法の例は、次のとおりです。

【保存方法の例】

- できる限り、ありのままの自然な状態で現地に保存
- 部分的な保存や、劣化対策を施しての保存
- 移設しての保存
- 疑似的に保存（ICT技術（AR³、VR等）の活用、情報杭の設置 など）
- 震災遺構等の状況に応じて、上記の方法を組み合わせた保存 など

（２）拠点の整備

熊本地震の記憶や経験、教訓のメッセージをより永く、確実に後世に伝えるとともに、国内外から多くの人々に熊本を訪れていただき、本県の更なる発展につなげていくためには、様々な情報を効果的に発信する拠点が重要です。

そのため、県は、広域的視点から、熊本地震に関する情報等を発信する中核となる拠点を整備します。また、市町村は、それぞれの地域の実情に沿った視点から情報を発信する拠点を整備します。

拠点が果たすべき役割は、次のとおりです。

- ア 被害の状況等、ありのままの熊本地震の姿を遺し伝える。
- イ 熊本地震に関する様々な情報を蓄積、管理、発信する。
- ウ 熊本地震の経験、教訓等を防災・減災に生かす。
- エ 災害対応や地域づくり、まちづくりに携わる人材を育成する。
- オ 熊本（地域）の魅力等の情報を発信する。
- カ 犠牲になられた方々を想い、追悼・鎮魂する。

県が整備する中核拠点と市町村が整備する拠点はしっかりと連携し、相互に活用することで様々な情報をより効果的に発信します。

① 中核となる拠点の整備

県では、熊本地震の特徴を踏まえ、広域的な視点から効果的に熊本地震の情報を発信するとともに、震災ミュージアムの総合窓口となり、県と市町村の取組をトータルコーディネートする、中核となる拠点を整備します。

中核となる拠点は、熊本地震からの復興のシンボル「熊本城」があり、国内外から多くの人々が集まる「熊本都市部」と、熊本が世界に誇る観光資源である悠久の宝「阿蘇」の入口に位置し、阿蘇大橋の落橋やその周辺の大規模斜面崩壊、高野台の大規模地すべりなど、熊本地震の象徴的な被災地である、「阿蘇地域」の二か所に整備します。

なお、益城町における「記憶の継承の拠点」をはじめ、市町村が整備する拠点のうち、広域的な視点から効果的に熊本地震の情報を発信する中核拠点と同様の機能を有し、その役割を十分に果たすことが見込まれる拠点については、関係市町村とも協議のうえ、震災ミュージアムの中核拠点としても位置づけることを検討します。

³ AR：拡張現実（Augmented Reality）の略 実在する風景に、疑似的な視覚情報を重ねて表示する技術

ア 熊本市部の中核拠点

南海トラフ地震等の発生が予測される中、全国的な災害対応力の向上は、喫緊の課題です。

そのため、国内外から熊本を訪れる多くの方々に対し、効率的に熊本地震の記憶、教訓等を伝えるために、熊本市部に中核となる拠点を整備します。多くの観光客が訪れる水前寺公園の近隣に位置し、行政等の視察も多く訪れる災害対応の司令塔である県防災センターに中核拠点としての機能を整備し、熊本地震の経験を踏まえた生きた情報を国内外に向け広く発信します。

イ 阿蘇地域の中核拠点

甚大な被害を受けた阿蘇地域の中でも、東海大学阿蘇キャンパスの被災、阿蘇大橋の落橋、その周辺の大規模斜面崩壊、高野台の大規模地すべり箇所等は、熊本地震の象徴的な場所であり、自然の驚異を感じさせ熊本地震の被害の状況をありのままに伝えることができる極めて重要な場所です。

特に東海大学阿蘇キャンパスは、熊本地震の大きな痕跡が土地・建物ともに当時のまま残っており、大変貴重なものです。

有識者会議においても、①阿蘇地域における熊本地震の象徴的なエリアに位置し、県内外にメッセージを発信できること、②直下の活断層により大きな被害を受けた希少な建物であることから、学術的価値が高く、保存し後世に遺せないか、との意見をいただいています。

そのため、東海大学阿蘇キャンパスを中核となる拠点として位置付け、熊本地震の象徴的な場所から、被害のありのままの姿や熊本地震から得た教訓、自然災害との共存の歴史、自然の驚異等の様々な情報を発信するとともに、本県観光の振興、地域づくり等に活用します。

なお、整備に当たっては、国、地元自治体や所有者等と密に連携します。

② 市町村における拠点の整備

市町村は、熊本地震の被害の実情や教訓等、地域の復興に向けた取組等の情報を発信するとともに、地域のコミュニティづくりや地域の活性化につながるよう、地域の実情に応じて拠点を整備することが望まれます。

【拠点に望まれる機能等】

- ・熊本地震の記憶や経験、教訓を伝承するための展示や学習、イベントの実施
- ・今後の災害に備えた災害対応訓練や避難所運営訓練等の実施
- ・復旧・復興に向けた様々な地域の活動の場
- ・地域づくりやまちづくり、地域を支える人材の育成
- ・地域の観光資源と震災遺構等を活用した交流人口の拡大
- ・地域の魅力等の情報発信

(3) 回廊ルートの設定

県では、広域的な視点から、熊本地震のありのままの姿を伝えるとともに、それぞれの地域における人々の生活や文化、歴史、復旧・復興に向かう人々の姿や思い、さらには、それぞれの地域が持つ魅力などを後世に伝え、国内外に発信していくために、熊本地震により出現した県内各地に広範囲に点在する震災遺構や各地域における復興に向けた活動の拠点を巡

るとともに、熊本地震の痕跡を残す文化・交流施設などの地域の拠点、企業活動の場、さらに復旧・復興に向かう地域の人々の姿が確認できるものや地域の魅力を伝える観光施設や観光地などをつなぎ、巡る回廊ルートを設定します。

なお、市町村においては、現在、震災遺構の保存等に関する検討を進めているため、回廊ルートや構成については、今後、関係市町村における検討の進捗状況や、各種団体、民間企業等における取組の進展に応じ、進化するミュージアムの取組の一つとして、随時、更新、追加を行います。

回廊ルートの例は、次のとおりです。

【回廊1】「活断層から熊本地震のありのままの姿を伝える」

- 甚大な被害をもたらした熊本地震のありのままの姿を、その特徴を踏まえ、約 30 kmにわたり地表に出現した地震断層を活用し、伝えます。
- 住家等の倒壊、道路の寸断、地域コミュニティの崩壊など、活断層がもたらした被害の実情を伝えます。加えて、日頃からの地域における防災・減災の取組や一人一人の備えの大切さを伝えます。
- 熊本地震で犠牲となった方々を想い、追悼・鎮魂します。

区分	遺構等	所在地	整備・運営等	発信する情報等
拠点	益城町役場	益城町	市町村	追悼・鎮魂、活断層がもたらす被害の実情、人々の生活やふるさとの風景に与えた影響
震災遺構	国指定天然記念物の断層	益城町	市町村	地震発生メカニズム、活断層がもたらす被害の実情、地域に伝わる逸話等
震災遺構	大切畑ダム周辺の断層	西原村	市町村	活断層がもたらす被害の実情
観光施設	依山交流館「萌の里」	西原村	民間等	失われたコミュニティの再生、地域の活力づくり、地域の観光情報等の発信
震災遺構	東海大学阿蘇キャンパス敷地内の断層	南阿蘇村	県	活断層が建築物等にもたらす影響
中核拠点	東海大学阿蘇キャンパス	南阿蘇村	県	熊本地震（全体）の被害の実情、活断層がもたらす被害の実情



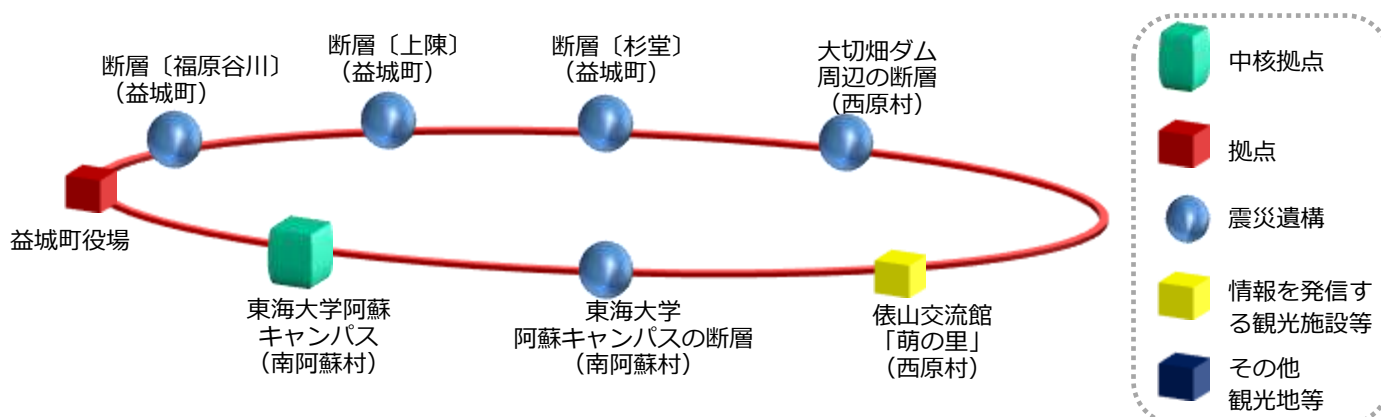
断層（福原谷川地区）



断層（上陳地区）



断層（杉堂地区）



【回廊2】「熊本地震から得た防災・減災の学びと復興する熊本を発信」

- 今後の災害に備え、熊本地震の経験から得た教訓等を踏まえた、防災・減災の取組や災害対応のノウハウ、避難所運営のあり方等に関する情報を発信します。
- 熊本地震からの復旧・復興に向け、力強く歩み続ける熊本の姿を発信します。
- 甚大な被害を受けた被災地から、熊本地震の経験、仮設住宅における生活の状況や居住環境、復旧・復興への想いを発信します。

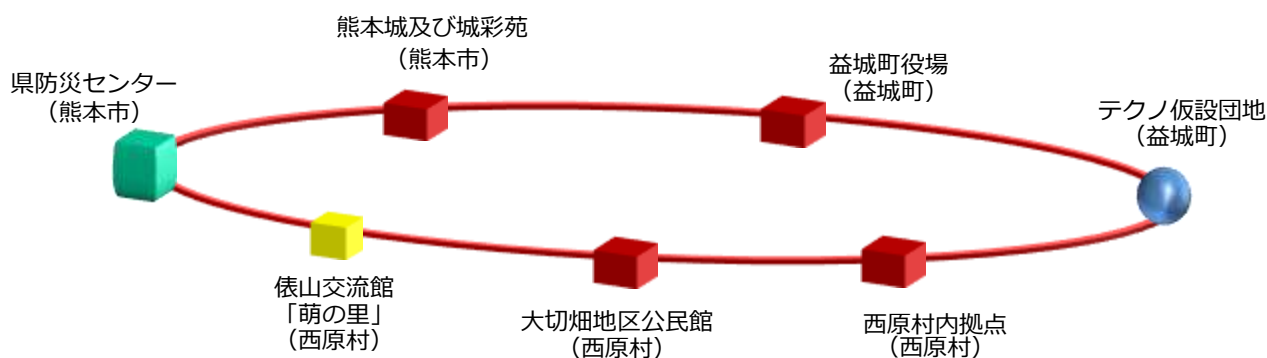
区分	遺構等	所在地	整備・運営等	発信する情報等
中核拠点	県防災センター	熊本市	県	熊本地震（全体）の被害の実情、熊本地震の概要、初動期の災害対応状況、防災・減災対策
拠点	熊本城及び城彩苑	熊本市	市町村	石垣や櫓などの被害の状況や復旧過程
拠点	益城町役場	益城町	市町村	益城町における復旧・復興の取組や地域再生の取組
震災遺構	テクノ仮設団地	益城町	市町村	避難所での経験や仮設住宅における生活の状況及び居住環境等
拠点	西原村内（仮設団地保存を含む）	西原村	市町村	消防団の活動により一人も犠牲者が無かった大切畑集落における取組（西原村の奇跡）
拠点	大切畑地区公民館	西原村	市町村	大切畑地区の集落再生の過程、地域おこしの取組
観光施設	俵山交流館「萌の里」	西原村	民間等	地域特産品の紹介、販売、地域情報の発信等



熊本城



大切畑ダム周辺



【回廊3】「自然の驚異と、自然とともに生きる郷土熊本の魅力を発信」

- 阿蘇大橋の落橋、その周辺の大規模な斜面崩壊、高野台の大規模地すべり、東海大学阿蘇キャンパスの被災等、熊本地震の象徴的な場所から自然がもたらす災害の脅威を発信します。
- 世界に誇る阿蘇の草原や山々などの自然からもたらされる豊かな恵みや文化、自然との共存の歴史を発信します。
- 阿蘇ユネスコ世界ジオパークと連携するなど、観光地阿蘇の魅力を発信します。

区分	遺構等	所在地	整備・運営等	発信する情報等
中核拠点	東海大学阿蘇キャンパス	南阿蘇村	県	熊本地震（全体）の被害の実情、熊本の自然の恵みや自然との共存の歴史、東海大学と地域の歴史（交流や絆）
震災遺構	東海大学阿蘇キャンパス敷地内の断層	南阿蘇村	県	被害の実情や自然の驚異
震災遺構	阿蘇大橋落橋及びその周辺の大規模斜面崩壊	南阿蘇村	市町村	被害の実情や自然の驚異
震災遺構	高野台及び京都大学火山研究センター周辺の大規模地すべり	南阿蘇村	市町村	被害の実情や自然の驚異
観光施設	阿蘇火山博物館	阿蘇市	民間等	自然の驚異、阿蘇山の成り立ち、観光地阿蘇の魅力
観光施設	阿蘇ファームランド	南阿蘇村	民間等	被害の実情や自然の驚異、観光地阿蘇の魅力、地域の観光情報等



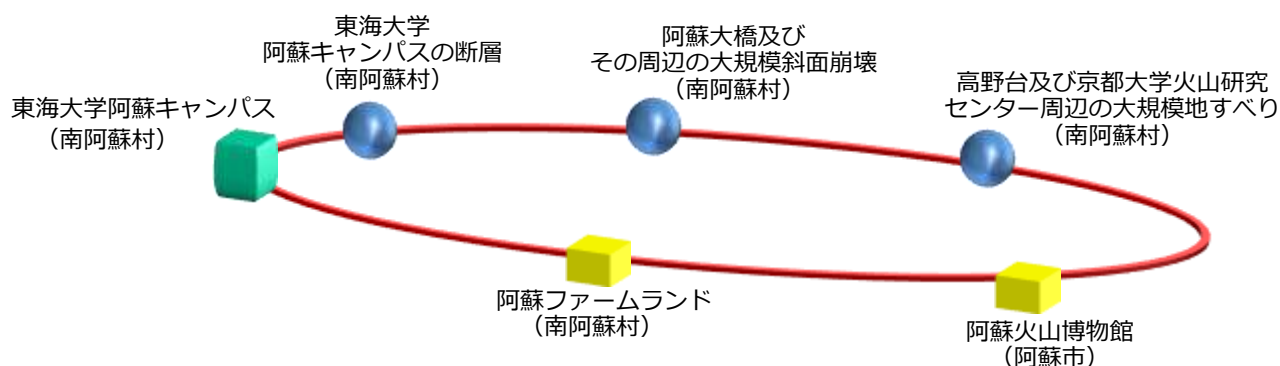
東海大学阿蘇キャンパス



阿蘇大橋



阿蘇火山博物館



(4) 記憶、教訓等を伝承する取組等

熊本地震発災から概ね2年が経過しようとする中、全国的な報道も激減し、国民の関心も薄まりつつあります。このような中、熊本地震の記憶や経験、教訓を風化させず、確実に後世に伝承するためには、継続的に情報発信に取り組むことが必要です。

一方、震災ミュージアムの実現には今後数年かかります。そのため、熊本地震のありのままの姿や避難所生活、災害対応等の経験や被災の体験談等の記憶が風化してしまう前に、記録として保存し、様々な機会を捉えて発信します。

また、熊本地震の記憶等を語り継ぐ方々の体験談等を映像として記録に残し、県庁舎において情報発信を行うなど、できることから順次取組を始めます。

- ① 熊本地震の記憶を保存し、風化を防止するための取組
 - ア 被災者の記憶や様々な記録の保存、語り部やガイドの育成
 - イ 震災遺構や拠点、熊本地震の痕跡を残す企業活動の場、観光地等を巡るツアーの実施（モニターツアーの実施、定期観光ツアーの開発など）
 - ウ VRや3D映像など最新のICT技術を活用した熊本地震の記録の保存、再現
 - エ AR技術等を活用した被災地まち歩きの実施 など

- ② 防災力向上の取組
 - ア 熊本地震の経験を生かした防災教育のための新たな教材の作成
 - イ 防災・減災や自助・共助、災害対応力の向上等をテーマとした各種イベント、セミナー、シンポジウムの開催
 - ウ 災害対応力強化のための出前講座の実施

- ③ 国内外に向けた効果的な情報発信
 - ア 震災ミュージアムの様々な情報を総合的に発信するポータルサイトの構築、SNSの活用、パンフレットの作成、機関紙の発行、他県の震災ミュージアムとの相互の情報発信
 - イ 国際機関等からの視察の受入、多言語化への対応
 - ウ 他県の震災ミュージアム（中越メモリアル回廊、人と防災未来センター、北淡震災記念公園等）とのネットワークづくりや本県の博物館ネットワークと連携した情報発信
 - エ 熊本城をはじめとした県内の被災文化財の復旧過程やその魅力を震災ミュージアムの取組の中で継続して情報発信
 - オ 阿蘇くまもと空港の再整備過程、八代港の国際クルーズ拠点の形成過程、南阿蘇鉄道の復旧過程等と連携した熊本地震関連情報の発信

- ④ 地域振興、観光振興への取組
 - ア 震災遺構や拠点を活用した地域コミュニティの再生、地域の活力づくり、更なる地域振興への寄与
 - イ 震災ミュージアムと県内各地の観光地や観光施設との連携による交流人口の拡大
 - ウ 国立公園満喫プロジェクトや阿蘇ユネスコ世界ジオパークなどの取組と連携した交流人口の拡大

(5) 持続可能な運営に向けた取組

① 運営主体

震災ミュージアムが熊本地震の教訓等を永く後世に伝え続けることができるよう、県による運営、関係市町村との協議会や第三セクターの設立、公益法人やNPO法人、企業等への委託などの多様な手法の中から、より適切で持続可能な運営を実現する方法を検討します。

【役割の例】

- 中核拠点の運営
- ポータルサイトの運営
- 市町村の拠点を含めた共通デザインの管理、共通広報の実施 など

② 国内外に向けた効果的な情報発信

断層保存や拠点整備など、震災ミュージアムが実現するまでのそれぞれのプロセスを継続して戦略的に発信します。

ポータルサイトやSNS等を活用するなど、国内外における認知度の向上を図り、交流人口の拡大を目指します。

進化する震災ミュージアムの取組として、震災ミュージアムの機能や展示内容は、定期的に刷新し、その情報を多方面に発信していきます。

【具体的な取組例】

- 震災ミュージアムの様々な情報を総合的に発信するポータルサイトの構築、SNSの活用、パンフレットの作成、機関紙の発行、他県の震災ミュージアムとの相互の情報発信
- 国際機関等からの視察の受入、多言語化への対応
- 他県の震災ミュージアム（中越メモリアル回廊、人と防災未来センター、北淡震災記念公園等）とのネットワークづくりや本県の博物館ネットワークと連携した情報発信
- 熊本城をはじめとした県内の被災文化財の復旧過程やその魅力を震災ミュージアムの取組の中で継続して情報発信
- 阿蘇くまもと空港の再整備や八代港の国際クルーズ拠点の形成過程、南阿蘇鉄道の復旧過程等と連携した熊本地震関連情報の発信

4 事業費及び財源の確保

震災ミュージアムの実現に当たっては、既存施設の有効活用やコンパクトな形での整備に努めるなど、将来にわたり、できるだけ財政負担が大きにならないよう十分に配慮します。

事業費の財源については、国からの補助金や交付金を最大限活用するとともに、民間からの資金協力を募るなど、あらゆる手法を検討し確保します。

- 国支出金（国庫補助金等）の活用
- 民間からの資金協力（寄付金、ファンド、広告料収入等）
- 熊本地震復興基金の活用 など

5 役割・推進体制、スケジュール

(1) 役割・推進体制等

① 県の役割・推進体制

県は、広域的視点から、熊本地震の教訓等を伝承するとともに、国内外に向け熊本地震に関する情報を発信します。

また、関係市町村との連携のもと、熊本地震の教訓等を伝承する取組をはじめ、震災ミュージアムを活用した地域活性化や観光振興等の様々な取組において、先導的な役割を果たすとともに、市町村の主体的な取組を支援します。

さらに、震災ミュージアムの実現に向け、部局横断的な体制のもと、しっかりと連携して取り組みます。

【県の役割】

ア 熊本地震の記憶や経験、教訓の伝承及び情報発信

- ・広域的な視点から熊本地震の記憶、教訓など、熊本地震のありのままの姿を後世に伝承します。
- ・教訓等をはじめ、熊本地震からの復興の軌跡や熊本の魅力など、様々な情報を国内外に発信します。

イ 防災対応の強化

- ・総合防災訓練の実施や警察・消防等との連携体制の強化により、県下全域における防災対応の強化を図るとともに、自助による災害対応力の向上や共助による地域防災力の向上を図ります。
- ・地域、学校、企業等における災害発生時に柔軟に対応できる人材の育成を支援します。

ウ 震災ミュージアム全体の連携、調整

- ・関係市町村、各種団体、民間企業等との連携のもと、震災ミュージアム全体の取組の総合的な調整を行います。

エ 中核拠点の整備

- ・熊本地震の記憶や教訓等の伝承、様々な情報発信を行う中核となる拠点を整備します。

オ 一日も早い熊本地震からの復興、熊本の更なる発展につなげる取組の実施

- ・交流人口の拡大により、観光振興や地域の活性化を図るなど、一日も早い熊本地震からの復興、更なる発展につなげる様々な取組に全庁あげて取り組みます。

カ 震災遺構等の保存

- ・関係市町村が行う震災遺構候補の保存（仮保存や本保存（ICTを活用した保存を含む。））に向けた取組を支援します。

キ 市町村との連携

- ・市町村と情報の共有を図り、一体となって取組を進めるため、連携会議を設置します。
- ・市町村が行う震災ミュージアムの実現に向けた取組（拠点の整備、コンテンツや展示物、教材の作成及び地域情報の発信など）を支援します。

ク 追悼・鎮魂

- ・犠牲になられた方々を想い、追悼・鎮魂します。

【県の推進体制】

震災ミュージアムの実現に向け、迅速かつ強力に取組を推進するため、全庁推進体制を構築します。

② 市町村の取組

市町村は、県をはじめ地域の団体や住民との連携のもと、地域の実情に応じて、震災ミュージアムを活用した、熊本地震の教訓等を伝承する取組や復旧・復興の取組、地域活性化等につながる取組を進めます。

ア 熊本地震の記憶や経験、教訓の伝承及び情報発信

- ・ 地域の実情に応じ、震災遺構等の保存、語り部の育成など、熊本地震の記憶、教訓等を後世に伝承します。
- ・ 地域における熊本地震からの復興の軌跡、地域の魅力など、様々な情報を写真や映像、展示物、教材等を通じて、国内外に発信します。

イ 防災対応の強化

- ・ 自主防災組織や警察・消防等との更なる連携などにより防災対応の強化を図るとともに、自助による災害対応力の向上や、共助による地域防災力の向上を図ります。
- ・ 地域や学校において、災害発生時に柔軟に対応できる人材の育成を図ります。

ウ 拠点の整備、管理等

- ・ 熊本地震の記憶や教訓等の伝承、様々な情報発信を行う地域における拠点を整備し、運営します。

エ 地域コミュニティの再生、持続可能な地域づくり

- ・ 震災ミュージアムを活用した復興に向けた住民活動の支援、防災をはじめ地域を支える人材の育成、地域の魅力発信等の取組により、地域コミュニティの再生、地域の活力づくり、更なる地域振興を図ります。

オ 追悼・鎮魂

- ・ 犠牲になられた方々を想い、追悼・鎮魂します。

③ 地域との共働

震災ミュージアムは、地域の想い等が反映され、永年にわたり持続可能なものとするため、地域住民や大学、企業等との共働により取組を進めます。

(2) スケジュール

震災ミュージアムは、できるところから取組を開始し、できあがっていくプロセスを戦略的に見せるなど、「進化し続ける震災ミュージアム」として、市町村や民間団体等と幅広く連携しながら、概ね5年間での実現を目指します。

2018年度	……………	<震災ミュージアムの具体化に向けた検討>
(平成30年度)		<ul style="list-style-type: none">震災ミュージアムの具体的な共通仕様等の検討 (共通デザイン、展示内容やコンテンツ、演出手法の検討など)中核拠点(東海大学阿蘇キャンパス)の断層の保存設計、建物調査
		<記憶、記録等の継承>
		<ul style="list-style-type: none">熊本地震の記憶等の保存(語り部等の記録の保存)熊本地震に関する情報発信 (県庁舎における映像上映、パネル展示など)震災遺構等を巡るモニターツアーの実施 など
		<遺構等の保存>
		<ul style="list-style-type: none">震災遺構候補の保存
2019年度	……………	<拠点の整備等>
(平成31年度)		<ul style="list-style-type: none">東海大学阿蘇キャンパス(断層)の保存 (中核拠点(東海大学阿蘇キャンパス)の部分オープン)熊本城天守閣(大天守)の外観復旧完了等(熊本市)高野台震災公園オープン(南阿蘇村)
		<震災ミュージアムの管理運営>
		<ul style="list-style-type: none">運営主体の設置震災ミュージアムの総合ポータルサイト公開 など
2020年度以降	……………	<拠点の整備等>
		<ul style="list-style-type: none">熊本城天守閣全体の復旧完了(2021年度)(熊本市)中核拠点(東海大学阿蘇キャンパス)のグランドオープン中核拠点(県防災センター内)のオープン益城町内の拠点の整備、オープン(益城町)西原村内の拠点の整備、オープン(西原村)